

月刊 CDCガイドラインの最新情報をとこよりも早くお届けします！
 編集長 / 矢野邦夫

11月号

第一七九回
 ウマへの曝露が
 関連した
 致死的感染症

動物園や街中で子どもが仔馬に乗れるコーナーが設置されることがある。子どもたちはとてうれしそうにウマの上に座り、親たちは楽しそうに写真を撮っている。このように動物に接触することは情緒教育としても大切なことなので、ぜひとも楽しんでいただきたい。しかし、動物に接触した後の手洗いは必ず実施するという条件付きである。米国において人獣共通病原体であるストレプトコッカス・ズーエピデミクスがウマからヒトに伝播し、死亡者が発生したとの報告が「ウマへの曝露が関連した致死的感染症」

[http://www.cdc.gov/mmwr/volumes/65/wr/pdfs/mm650a5.pdf] に記載されているので紹介する。

2015年3月17日、ワシントン州のシアトルおよびキング郡の保健所は2人の患者がストレプトコッカス・ズーエピデミクス（馬連鎖球菌感染症）の診断を受けた。ストレプトコッカス・ズーエピデミクスは「低温殺菌されていない乳製品の消費」もしくは「ウマへの直接接触」に関連する人獣共通病原体であり、まれにヒトに病気を引き起こす。ウマでは常在菌であるが、呼吸器、創部、尿路感染症を引き起こすことがある。保健所はアウトブレイクの程度を決定し、危険因子を同定し、勧告を提供するために調査を開始した。患者Aは普段健康な37歳女性である。彼女はワシントン州キング郡の施設で乗馬施設を経営していた。そこでは6頭のウマに餌をやり、手入れをし、訓練していた。また、毎日、馬屋を清掃した。2015年2月21日の週に、彼女には軽度の咽頭炎と咳嗽がみられた。同じ週に、ウマAにも粘液性の目および鼻分泌がみられ、活動が低下した。2月29日、彼女はウマAにサルファ剤をベースとした抗菌薬を10日間投与し、ウマは何事もなく回復した。患者Bは通常元気な71歳の

女性であった。彼女は患者Aの母親であるが、患者A宅を訪問して、同じ世帯に住んでいるときの2月21日の週に上気道感染の症状がみられた。3月2日に嘔吐と下痢となった。3月3日に意識不明で発見され、病院に移送されたが、同日に死亡した。患者Bは少なくとも2月25日と2月29日にウマAに濃厚接触（乗馬、愛撫、歩き）していた。ウマAおよびほかの2頭の健康なウマから3月10日に収集した鼻スワブの培養結果ではストレプトコッカス・ズーエピデミクスが陽性であった。患者Aは過去2カ月間に低温殺菌されていない乳製品は消費しておらず、ほかの動物（健康な猫を除く）への曝露はなかった。3月10日に収集した患者Aの咽頭培養および患者Bの血液培養からストレプトコッカス・ズーエピデミクスが検出され、これはウマAおよび施設の2番目のウマから培養された分離菌とパルスフィール

ド電気泳動法にて一致した。3番目のウマから培養されたストレプトコッカス・ズーエピデミクスはほかの分離菌と一致しなかった。患者Bは年齢および先行上気道感染症ゆえに侵襲的疾患の危険性が高かった。ストレプトコッカス・ズーエピデミクスはヒトでのまれな人獣共通病原体であるけれども、高齢者は致死的感染症になる危険性が高い。これまで報告された32件の症例での7件の死亡例では年齢中央値は61歳（範囲：1歳未満～83歳）であった（致死率22%）。ウマおよびほかの動物に接触した後、動物が飼育されている区域に触れた後には石けんと流水による十分な手洗いをつねに実施することが推奨される。

プロフィール



やの・くにお
 浜松医療センター
 副院長 兼
 感染症内科長
 「ねころんで読める
 CDCガイドライン
 (メディカ出版)」
 シリーズ等、CDC
 関連の編・訳書多数。

●今月の矢野編集長

先日、北欧に行った。おもしろかった。スリに財布をすられたが、凄腕だった！ほとんど神業のスリ技術なので皆さんも気をつけましょう。